

いきいきと生きた先人たち

— 資料叢書^{そうしよ}4 『渡邊明採集資料』 刊行 —

考古部会専門調査員 萩野谷 悟

この3月、市史資料叢書シリーズの4として『渡邊明採集資料』を刊行しました。

渡邊明氏(1949-2024)は、那珂市にお住まいだった考古学研究者で、研究のため県内を中心に膨大な量の考古遺物を採集されていました。そのうち当市関係資料を、生前、寄贈してくださったのです。資料の数は26,680点もありました。

『渡邊明採集資料』では、そのうち1,874点を図と写真に説明を加えて紹介しています。

■縄文時代にアスファルト

今回は、その中から、縄文時代と中世の広域交流に関する資料を紹介します。

縄文時代の広域交流というと、黒曜石やヒスイなどを思い浮かべますが、今回はアスファルト(瀝青^{れきせい})を紹介します。現代のアスファルトは原油精製にともなっているもので、道路舗装などに使われていますが、縄文時代のアスファルトは油田地帯に天然に産出する、油分を含んだ黒色の固体または半固体のもので、「土瀝青^{どれきせい}」とも呼ばれます。熱を加えると液体になり、縄文時代には石鏃^{せきぞく}(矢尻)を矢柄に装着する際に接着剤として使われていました。小野天神前遺跡の例のように、その一部が石鏃に付着している場合があるのです。磨石に濃厚に付着している例もあり、これは固形物でもたらされたア



常陸大宮市史資料叢書4 考古1『渡邊明採集資料』

スファルトを砕くのに使われたものと思われます。

アスファルトは日本海側の新潟県・山形県・秋田県などの油田地帯で採掘され、東北地方の遺跡を中心に出土します。茨城県では採れないものであり、何らかの方法で入手していたわけです。

■鎌倉時代の九州産石鍋

古代から近世にかけては陶磁器が広く流通することが知られていますが、ここではやや特殊なものとして中世・鎌倉時代の石鍋を紹介します。下小場遺跡で、小さな破片ですが、滑石製の石鍋が採集されています。県内2例目です。石鍋の産地は長崎県に^{にそのぎ}西彼杵半島にほぼ限られており、先人たちのうちの一部有力者が、何らかのルートで九州産の石鍋を手し使っていたと思われます。

■いきいきと生きた先人たち

こうした資料を通して見ると、この地域に生きた先人たちは、なかなかダイナミックな世界を、いきいきと生きていたと感じます。



石鍋 (下小場遺跡採集)



アスファルトが付着した石鏃と磨石 (小野天神前遺跡採集)